

「文化史・文化理論の再構築」 プロジェクト特集にあたって

佐々木 充

本プロジェクト「文化史・文化理論の再構築」は、いささか大げさな名称の観があるが、実際には、各人がそれぞれの特定の分野の研究を掘り下げつつ、文化史・文化理論という普遍に結びつこうとする試みを行っている。今回その研究の成果として論文を投稿することになった四人（齋藤陽一、猪俣賢司、逸見龍生、佐々木充）は、それぞれロシア文学、比較文学、18世紀フランス思想史、英文学を専門分野とするが、逸見論文を別とすれば、そのテーマは、演劇、ゴジラ映画と小津安二郎、小林秀雄と、表向きの専門分野とは異なるものである。しかし、専門分野と称するものも、これまでの十九世紀的な学問の枠組みによって限定を余儀なくされていたものであって、本当の意味での本来の関心とは、まさに「文化史・文化理論」という名称が示すような広範囲にわたるものである。「文化史・文化理論の再構築」プロジェクトのメンバーは、一名をのぞき、人文学部情報文化課程文化コミュニケーション・コースの教員であるが、このコースに所属することによって、この狭い枠組みから解放され、本来の関心に沿った研究と教育を行うことが可能になったという事情がある。このような事情も、今回のこのプロジェクト特集には反映している。

齋藤論文は、平成20年度に担当した「超域文化論」という科目から生まれたものである。この科目の中で、演劇未経験の学生を指導するという機会があり、その際に参照したのが、スタニスラフスキー・システムであった。一般的には、モスクワ芸術座、チャーホフと結びつけてスタニスラフスキーは記憶されているが、スタニスラフスキーがシステムの「完成」を図っていた時にはツルゲーネフの『村の一月』の演出に関わっていた。齋藤論文では、システムの発展という面からみた『村の一月』の演出について考察している。

猪俣論文は、まさに文化コミュニケーション・コースでの講義から生まれてきたと言っていい論文である。ゴジラ映画と小津安二郎の映画は、1950年代、昭和の東京を描き続けてきた映画である。そこに描かれた「東京」とは、断ち切られた抽象的な空間（吉田喜重などの先行研究）などではなく、1950年代のアクチュアルな、連続した現実の東京であって、当時の歴史的・地理的事実を確実に反映している。小津映画の撮影監督で鉄道マニアでもある厚田雄春や、飛行機マニアであった特技監督の円谷英二の存在は、物言わぬ「モノ」の描写によって、小津映画やゴジラ映画の映像の確かさというものを支えていた。つまり、嘗て生きていた東京の過去の現実に根差していたのである。この論文では、小津の描く1950年代の東京と、そこに嘗て存在した建物（銀座松屋のファサード）、橋梁（三代目東海道本線六郷川橋梁）、鉄道線（横須賀線や京浜東北線）、電車車輻（クハ79形）、飛行機（ストラトクルーザー）などの検証を通して、小津映画のロケーションとその映画技法（映画表現）が不可分な関係にあることを詳述している。小津の描く東京は、「点」や「線」によって描かれるのが常だが、それらを繋いでゆくと「面」（東京の地理学、トポロジー／地図）が確実に浮かび上がる。東京東部の銀座や隅田川のみならず、東京南部の大田区蒲田や六郷川（多摩川）に着目することにより、松竹キネマ蒲田撮影所の生んだ小津映画の特徴を捉えた。取り分け、京浜東北線（蒲田駅）、羽田空港には、大田区の戦前・戦後の連続性が認められる。そして、小津もゴジラ映画も、隅田川東岸を描こうとしない。逆に言えば、つまり、戦後日本は、東京大空襲の敗戦の残映を記憶し続けているのである。この論文は、歴史的・地理的な連続性（戦前と戦後の連続性、点と線を繋ぐと現われてくる面の連続性、ゴジラ映画では当然の事柄）という視覚を通して、小津を新たな視覚から捉え直し、表象論としての小津論（蓮實重彦）と東京論としての小津論（川本三郎）を結び付けたのが、「文化史・文化理論の再構築」としての特徴でもある。

逸見論文が扱うのは、18世紀初期啓蒙思想において発禁や検閲を恐れつつ、写稿や地下刊本の形で流通した、多く匿名著者による「哲学的地下文書」（Littérature clandestine philosophique）の代表作のひとつ、『宗教の検討』（1705?）である。Margaret C. Jacob や Jonathan Israel 等の近世思想家は、近年「根底的・

急進的啓蒙思想「Radical Enlightenment」という包括的概念によって、17世紀から18世紀にかけてのヨーロッパ啓蒙期における重要な伏流のひとつを取り上げている。それはいわゆる「啓蒙思想」の輝かしい主流をなすヴォルテールや英国ニュートン主義者などの穏健的改革派とは異なり、反王制、反宗教を標榜する政治的にも宗教的にも過激な知的集団たちの系譜であり、理性と進歩による人性の漸次的変革を期する「啓蒙」=光 Les Lumières に対し、むしろこの時代が暗部に抱え込んでいた知的矛盾や緊張を表象する点で、急速に着目されつつある領域である。18世紀を通じてヨーロッパ全土に流布した「哲学的地下文書」群は、この意味での Radical Enlightenment の思想的媒体としてきわめて重要なテキストである。逸見論文はデュマルセ作と伝えられる『宗教の検討』の射程を分析し、プロテスタンティズム（ユグノー）、フランス合理主義神学の思想的伝統との関連においてこれを新たな視点から解釈している。プロテスタンティズムの寛容論の伝統の中で特殊な意味を担わされた「検討」（examen）という概念を軸に、この概念をめぐる生成と構造を17世紀後半の英国と大陸の対照的な宗教的言説のうちに探り、権威への不服従の論理における両者の力点の置き方の違いを捉えながら、「絶対的なものの承認と不承認をめぐる抗争的な言説の場として絶えず現われる次元」としてこれを捉えていく。『宗教の検討』に描かれたのはいわば、「普遍主義の内部で、普遍を担保にしなが、普遍者の構成条件を下部から切り崩すことを可能とする背反的な政治的論理」であった。本論は、18世紀のこの「哲学的地下文書」を初めて邦訳で紹介した『啓蒙の地下文書I』（野沢協監訳、逸見龍生ほか訳、法政大学出版局、2008）に寄せられた論文に加筆改稿した上で、2008年9月23日に名古屋大学国際シンポジウム（「啓蒙の東西」）で仏語で発表されたものを土台としている。論文の中で取り上げられているアイルランド啓蒙思想の一部の研究に関しては、2006年度人文学部教育研究推進費による助成を受けた。

佐々木論文は、小林秀雄の『ゴッホの手紙』について、小林が批評の材料とした英訳と仏訳のゴッホの手紙に当たり、その誤訳とずらしの手法について論じている。小林秀雄は、筆者が学生の時から影響を受け続けてきた批評家である。小林は自立せる批評という意味で近代批評を確立した人間であると言われ

ているが、日本文化におけるその位置がこれほど定めがたい人間もいない。小林秀雄とは、小林と個々人が交わりあう場所からしか、それを定めることができないような仕事をしてきた人間であるからだといえる。今回の小林の『ゴッホの手紙』についての論文は、小林の批評における誤訳の問題と、それに関連して、引用文を原文の文脈から置き換え、意味を変化させてゆくずらしの手法について扱っている。小林の批評は、学問的な意味での実証的客観的な吟味に耐えるものではないにもかかわらず、その扱う対象は小林の文章から明確な姿を現し、客観的と称される論文からは得られないような強い印象を与え、影響を残す。このように客観視しにくい小林秀雄の文章の文化史的な意味を考えようとしたのがこの論文である。また、この論文は、2008年12月11日に行われた「表現文化研究会」での発表に基づいているが、この研究会は高木裕教授が代表である人文学部の別のプロジェクト「〈声〉とテキスト論」との共催であり、佐々木は同教授の科研費補助金基盤研究(C)「声とテキストに関する比較総合的研究」にも加わっており、本論文はその成果の一部でもある。

以上、テーマを全く異にする四篇の論文により今回の特集が組まれることになった。テーマは異なるが、これまで変貌を重ねてきた文化の個々の分野において、新たな意味を見出そうとする意欲においては共通している。その意気込みをこれらの論文から汲み取っていただければ幸いである。